

パロディの はびこる土壤



小川琢士

帰りの学活終了後、「からすの勝手でしよう」という言葉を耳にした。五
月ごろであった。「私の勝手だ」とい
うかわりに使つたのだから生徒間では
かなり流布しているにちがいない。そ
の生徒に事情を聞いてみた。童謡「く

ロディ ように「鳥なぞ鳴くべ。鳥の勝手でしよう」と、意表をつくおちをつけて歌うのが流行だということがわかつた。

私はその時、軽いショックを受けた。この驚きはどこから起きたのか。面白半分に、興味本位につくった歌だとは思ったが、教育は層困難になることを感じた。童謡が持っている意味での日本の想像のパターンをこうそうとしている。自分の恣意的な心情を安易に正当化するために日本の童

諂ひをゆがめている。更に、想像力を支えている愛情を拒否することにもなっている。そんなふうな直観があったのである。この判断には多分に性急な面もあるとは思うが、一時的な遊びだと楽觀ばかりもしていられない。これは現代の中学生にみられる自己本位で、短絡的な心情を増幅している言葉ではないか。友達の立場になって考えてやろうとする行為を切り捨てた発想である。勿論柔軟な感受性を持つ生徒も多いが、このようなパロディーがはびこる土壤から、次の世代を担うに足りる青少年が育つとは考えられない。

パロディーを恐れるのではない。パロディーによって純粹な想像力が汚されたり、芽を摘まれた結果、しらけの世代をつくりだすことを察じるのである。

パロディでやゆする態度から生まれ育つものはたかが知れている。パロディによって破滅していく生徒の可能性は限りもなく大きい。パロディはまともな行為、本質的な思考を停止させ、しらけの心情をつくりだす。国語の授業で、まともなもの、堀りさげなければ本質に迫っていく本物について、論説文や古典的な文学作品を通して考えさせる努力をしなければと思う。

もう一つ、古い歌をうたい、テレビのコマーシャルを知らない教師を、もう古いと断言する中学生の傾向についてである。「新しい」といわれる教師になればいいという解決のし方ではなく、「古い教師」と、生徒側が心情的

に決めつけたとき、教師の指導力に微妙なマイナスの変容が生じてくることを案じるのである。生徒を指導し、説得できる力量を持続するための努力が必要だと思う。古い歌を大切にし、テレビやラジオから流れるコマーシャルを知らないことが、古い教師の条件でないことを了解させる手立てが大切である。情報公害をよく理解させることである。現代、流行している歌には年配者の作詞、作曲になるもののがかなりある。年配者が努力してつくった歌が多く、若者にうたわれている事実もわかつてもらう必要がある。若者と年配者、高齢者のつながり、連帯の姿を知つてもらわなければとも思う。そういう努力をしないで、中学生の新しがることを何でも知つて話を合わせていくことに執着すれば、しらけの世代をつくることに加担していくことになるだろう。広い意味での日本の伝統を大切にしていく努力の中から感動が生まれ、想像力が働き、充足感がわいてくる。

想像力が働き、充足感がわいてくる。現代の生徒は「かっこよさ」を大切にする。「かっこよさ」のための「かっこよさ」は、しらけの心情と表裏をなした行為である。かっこよければ悪いことでも平気でやる可能性を事前に摘んでやること。教室での生徒の言動をしつかり見つめて、適切な指導をしていくことの大切さをしみじみと考えることのころである。



この子に感動を